

# モダニスト再考 [海外編]

建築の20世紀は  
ここから始まった

Modernist Reconsidered | Overseas



**モダニスト再考** [海外編]

建築の20世紀はここから始まった

彰国社編

彰国社

| 1840 | 1850 | 1860 | 1870 | 1880 | 1890 | 1900 | 1910 | 1920 | 1930 | 1940 | 1950 | 1960 | 1970 | 1980 | 1990 | 2000 | 2010 |

はじめに

本書は、20世紀における建築の最大のムーヴメントである「モダニズム」を、人物に焦点を当てて再読するものです。

建築のモダニズムは、建築という分野において革新的であつたにとどまらず、社会思想や哲学、美術といった分野とも連携をしいて、社会を大きく変革しうるヴィジョンをも提示しました。本書には、教科書的な通史においては触れられない具体的なディテールとともに発見的な視点が数多く盛り込まれています。これらに触発されるだけでなく、モダニズム生成のさまざまな場面を生々しく追体験しながら、モダニストたちが建築と社会の革新に向けてかけた思いとそのエネルギーを感取していただければと思います。

設計の現場では、いまだその多くをモダニズムとともに生まれた建築言語に依拠しています。モダニズムへの視点を新たにすることは、日々の作業を新たに見つめ直す契機ともなるでしょう。他分野の、建築家たちと併走し互いに影響を与えあつた人物も取り上げていますが、これがさらにまた、モダニズムへの幅広い視点を提供することになるでしょう。

本書の目標は、モダニズム観の修正・更新にとどまりません。それに加えてここで目指したいのは、各テキストによって提出された新たな視点が、われわれの現在の位置——どのような位置においてわれわれは建築に接しているのか——を測定し、さらにできうるならば、それによつて未来の展望——われわれはどこに向かつて行くのか——をうることに〈使用〉され、またそれらの視点が日常の設計の現場でも〈活用〉されることです。

モダニズムでもすでにわれわれの〈使用・活用〉に耐ええなくなつてしまつた考え方が少なからずありますが、いまだアクチュアルなものとしてわれわれの〈使用・活用〉を待っているものもまた少なくありません。〈使用・活用〉できるか否かは、われわれの創造的な「モダニズム再読」にかかっていると信じてほしいでしょう。

さあ、モダニズムから始めよう——。

- 002 はつぱい
- 008 オットー・ヴァーグナー | Otto Wagner | 装飾と価値真空 | 田中純
- 022 ルドルフ・シュタイナー | Rudolf Steiner | 神殿の世俗化 | 田中純
- 036 フランク・ロイド・ライト | Frank Lloyd Wright | クリテカル・リージョナリズム以後 | 暮沢剛巳
- 050 チャールズ・リー・マッキントッシュ | Charles Rennie Mackintosh | マッキントッシュ神話とデザインの地政学 | 田中純
- 058 ベーター・ペーレンス | Peter Behrens | 芸術／技術、その切断の狭間で | 田所辰之助
- 072 アドルフ・ロース | Adolf Loos | ポチヨムキン文化への加重暴行 | 大島哲蔵
- 086 ビート・モンドリアン | Piet Mondrian | 新造形主義の夢想 | 暮沢剛巳
- 092 オーギュスト・ペレ | Auguste Perret | 2の葛藤 | 後藤武
- 100 アイリーン・グレイ | Eileen Gray | 「ヒンジ的なるもの」による「模様のうちなる白紙」 | 川上比奈子
- 116 テオファン・ド・ウースブルフ | Theo van Doesburg | 協働と対立の狭間 | 奥佳弥
- 128 グンナー・アスプルンド | Gunnar Asplund | スケールの攪乱 | 後藤武
- 134 ルートヴィヒ・ヒルベルザイマー | Ludwig Hilberseimer | 建築の無化としてのアーバニズム | 大島哲蔵
- 146 ミース・ファン・デル・ローエ | Mies van der Rohe | 無柱空間と自由壁の原理 | 槻橋修
- 166 ルドルフ・シンドラー | Rudolf Schindler | 奔流はどこにも帰属しない | 大島哲蔵
- 172 ル・コルブジエ | Le Corbusier | ル・コルブジエの欠如体 | 岡田哲史
- 186 ヘリット・トーマス・ウィットフェルト | Gerrit Thomas Rietveld | 事物と概念のへあいだへに立つ者 | 南泰裕
- 200 ジークフリート・ギーデオン | Siegfried Giedion | 近代建築を広報した男 | 五十嵐太郎
- 212 ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン | Ludwig Wittgenstein | 超越論的ディテール | 後藤武
- 224 ハンネス・マイヤー | Hannes Meyer | 建築は機能×経済 | 宮島照久
- 236 エル・リシツキー | El Lissitzky | プロウン・ルームへの招待状 | 丸山洋志
- 252 フレデリック・キースラー | Frederick Kiesler | 棺としての無限住居 | 田中純
- 258 リチャード・ノイトラ | Richard Neutra | インターナショナル・スタイルを超えて | ケン・タタシ・オオン
- 264 ラースロー・モホリ・ナギ | László Moholy-Nagy | モホリ・ナギ | Towards New Life / New Technology | 米田明
- 276 バックミンスター・フラー | Buckminster Fuller | ライフサイエンス、デザイン、そして建築 | 暮沢剛巳
- 282 アルヴァー・アールト | Alvar Aalto | ハロールの建築家 | 槻橋修
- 290 マルト・スタム | Mart Stam | 近代「ハウエン」の殉教者あるいは虚空に消えたアヴァンギャルド | 矢代眞己
- 302 カレル・タイゲ | Karel Teige | 「構 成」の詩学を説いたイデオログ | 矢代眞己
- 310 ジャン・ブルウエ | Jean Prouvé | アール・ヌーヴオーからジェット機へ | 手塚貴晴
- 316 アダルベルト・リベラ | Adalberto Libera | モダン・サブライムのゆくえ | 南泰裕
- 324 ジュゼッペ・ペテラーニ | Giuseppe Terragni | 唯物論的フォーマリズム | 後藤武
- 336 オスカール・ニーマイヤー | Oscar Niemeyer | All that is solid melts into air | ブラジリアをめぐる「注釈」 | 暮沢剛巳
- 342 ジョセフ・リクワート | Joseph Rykwert | 起源への問いを通して近代を思考する歴史家 | 五十嵐太郎

執筆者プロフィール

348

執筆者プロフィール

350

図版出典・写真撮影

# Otto Wagner

## オットー・ヴァーグナー

1841-1918

オーストリアの建築家。前期の代表作「マジヨリカ・ハウス」「カールスプラッツ駅」では華やかな装飾要素が目を引き。後期を代表する「ヴァイン郵便貯金局」では、装飾を減じて表現の抽象度を高めているが、1920年代のモダニズム建築の平滑な表面と比較して過渡的な表現とも評される。

フエティツシュ

## 装飾と価値真空

田中純

### 「建築芸術家」による発明

1841年生まれのおットー・ヴァーグナーは1880年代までにすでに成功した建築家であり、そのモニュメンタルな建築の洗練された装飾性は高く評価されていた。歴史主義を大きく逸脱しない作風であったからこそ、彼は1894年に、ヴァイン美術アカデミー建築学科の正教授に任命されたのである。同じ年にヴァーグナーはヴァインの都市交通問題委員会およびドナウ河改修事

業委員会の芸術顧問に就任しており、この前年におこなわれたヴァイン市総合整備計画設計競技では1等を受賞していた。このように彼はすでに皇帝の建築家、帝都ヴァインのマスターアーキテクトと呼ぶことも許されるような地位を得ていたのだ。ヴァーグナーは1890年に出版した作品集の序文で「実用様式」を未来の様式と位置づけており、「近代建築」への方向転換はこのころすでに始まっていたと見るべきかもしれない。

1895年にアカデミーの学生向けに教科書としてまとめられた著書『近代建築』では、「実際のでないものは美しくなりえない」「1」と宣言されている。しかし、問題なのはヴァーグナーが敬愛したゴットフリート・ゼンパーに由来する「芸術を支配するものは必要のみ」といった主張や「実用様式」という言葉そのものではなく、それらが置かれたコンテキストである。ヴァーグナーが当時携わろうとしていたのは、市営鉄道およびヌスドルフ区の水門施設という技術的建造物のデザインだった。ペーター・ハイコは「19世紀に起こった建築技術者と建築家の分裂を、ヴァーグナーはこの大工事で元に戻そうとしていたのである」「2」と評している。この時代、増加していた重要な建築計画の多くが技術者の手に委ねられる一方で、建築家の役割はそのごく一部を装飾的にデザインすることだけに限定されかねない状況が訪れていた。ヴァーグナーが抵抗しようとしたのはこうした趨勢であったのだが、ハイコが暗示しているように、それは分裂を「元に戻そう」とするノスタルジックで退行的なイデオロギーをはらんでいる。『近

代建築』が「建築家」と題された章から開始されていることもまた、建築という職能が置かれたこのような状況に対するヴァーグナーの危機感に由来する。

『近代建築』でヴァーグナーは、「内的構造に完全に対応した外観」という「真実」を求める努力を建築家に要求し、「内的構造に気に入りの外観モチーフを当てはめること」を「嘘」として激しく糾弾している「3」。ここからつねに「構造」から出発して芸術的形態を発展させるべきことが説かれる。しかし、それは技術者ではなく、「建築芸術家」によつてのみ可能である。なぜなら「あらゆる構造の原思考は、しかし、計算の展開、静力学的な計算に求めるべきでなく、ある自然な創意に求めるべきであり、それは何か発明されるものである」「4」からだ。構造から出発したはずのデザインプロセスはここで奇妙にも逆転し、建築家は「自分の創造する形象に最も自然に合二でき、そして生成する芸術形態に最もよく適合する構造を選び、決定し、完成させ、あるいは発明する」「5」とされて、建築家＝芸術家の創造する「形象」に対す



上:「カールスプラッツ駅」  
1898-99年  
下:「ヌドルフ区の水門施設」

る「構造」の従属が主張されるのである。『近代建築』は後世のわれわれがその題名から期待するように、明確な論理を伴った新しい建築のマニフェストではなく、建築物を生産する社会システムにおける建築家・芸術家という伝統的職能集団の存続を賭けた戦略的な文書であり、その意味できわめて保守的なイデオロギーを伴っていた。

ヴァーグナーのこうした目論見は同時代にあっても理解されたとはいえず、『近代建築』の出版前後から、彼は激しい批判に曝された。その攻撃は1899年の分離派への加入によってさらに

高まった。第2版以降の『近代建築』の前書きでヴァーグナーは、「近代派」とその敵との闘争について繰り返し言及し、近代派の勝利をその都度宣言している。

一見したところ、ヴァーグナーが闘わなければならなかった敵とは、旧態依然とした歴史主義の信奉者たちであったように見える。しかし、彼の真の敵はむしろ建築芸術というジャンルを侵食していた技術の脅威だったのであり、歴史主義的な建築家たちは、建築芸術家が直面していたこの危機に無自覚であったからこそ、非難されなければならなかったのである。確かに敵対勢

力も多かったとはいえ、ヴィーンを、したがってオーストリア・ハンガリー二重帝国を代表する建築家であったヴァーグナーは、体制の中心にいたがゆえにその体制を刷新する必要を強く感じていた。彼は建築家という職能を守るために、建築家たちの常識を自ら率先して破壊しなければならなかった。

すでに60代に近いヴァーグナーが分離派に加わったこともまた、こうした危機感にもとづくものと考えべきだろう。分離派はヴァーグナーにとって、アカデミーからの離反というその革新性においてよりも、むしろヴァルター・ベンヤミンがアル・ヌーヴォーのうちに見た「技術との対決」というモチーフにおいて身近な運動だった。ベンヤミンは「技術というモチーフへのアル・ヌーヴォーの回帰は、技術のモチーフを装飾によって中和しようとする試みから生じている」と述べ、これとの関連でアドルフ・ロースによる装飾否定論がもつ「政治的な意義」に言及している<sup>[6]</sup>。ヴァーグナーはロースの明晰な論理が導き出す装飾否定の寸前で立ち止まり、装飾による「中和」のうちに技術との対決をおこなおう

とする。なるほどそれは「建築」を守り抜こうとする保守的な革命ではあったのだが、ヴァーグナーの闘いは帝国の終焉と並行した軌跡を描きながら、むしろ伝統的文化価値の清算にも似たプロセスに近づいていく。この解体過程の論理はヴァーグナーの建築作品における装飾の意味作用のなかにたどることができらるろう。

#### 視線の停止点としての無用な装飾

1898-99年のリンケ・ヴィンツァイレ38番地および40番地の住宅でヴァーグナーは、それぞれの階のデザインを微妙に変えることで階層化する手法を捨てている。『近代建築』ではその根拠として、エレベーターの設置により、各階の賃貸価格が大幅に均等化された事実があげられている。このような場合、建物外観のモチーフを宮殿建築に探ることは誤りであり、なぜなら「それは建物のまさに内的構造に矛盾するからである」<sup>[7]</sup>とヴァーグナーはいう――